

喉頭直下に限局性に生じた猫の良性気管狭窄の 1 例  
相模が丘動物病院 呼吸器科 (フジイチョコ)

症例は、猫 (ラグドール)、去勢オス、8 歳 9 ヶ月齢。4 年前より気管狭窄を指摘され、1 ヶ月前より喘鳴が悪化し、精査加療のため呼吸器科紹介受診。

体重 3.60kg、呼吸数 16 回分、削瘦、低音調の喘鳴、痰産生咳、頸部周囲に軽度の捻髪音あり。

低酸素血症 (Pao2 62mmHg)、胸部 X 線写真にて縦隔気腫、気管狭窄部位の裂傷が疑われた。

1-14d 酸素投与下ケージレストおよびネブライゼーションにて縦隔気腫治癒し、血液ガス値改善 (Pao2 102mmHg)。胸部 X 線写真にて喉頭直下に気管狭窄を認めたが、呼吸状態安定のため一時退院。在宅ネブライザー療法で経過観察。

29d 喘鳴再燃。再入院

35d 気管支鏡検査にて良性狭窄を確認し、T チューブ設置。両側の甲状腺腫大認める。T4 値正常で甲状腺機能低下なし。

39d 退院

42d 自宅で T チューブ滑脱のため再設置。

45d 退院。在宅ネブライゼーション+抗生剤投与にて在宅管理。

101d 経過良好。BW4.86kg (+35%)。T チューブ抜去。在宅管理継続。

114d 喘鳴再燃。

129d 気管管状切除および吻合術。第 2-3 気管軟骨輪は限局性に軟骨構造不明瞭でゴム状に軟化し、この部分を切除し第 1 および第 4 軟骨輪を吻合した。

141d 経過良好。気管支鏡にて癒合良好を確認した。

143d 退院

犬猫の良性気管狭窄は、気管チューブのカフ圧過剰による気管粘膜壊死、挿管時気管粘膜損傷、咬傷や交通事故などの頸部気管外傷に継発することが知られている。

猫では頸部気管以下で良性気管狭窄で生じることが報告されているが、喉頭直下での出現は報告がない。外傷以外の原因も考察



症例は、猫（ラグドール）、去勢オス、8歳9ヵ月齢。4年前の去勢手術時に気管チューブ挿管困難。1ヶ月前より喘鳴が悪化し、前医にて気管狭窄と診断。精査加療のため呼吸器科紹介受診。体重 3.60kg、呼吸数 16 回/分、削瘦、低音調の喘鳴、痰産生咳、頸部周囲に捻髪音、低酸素血症（Pao<sub>2</sub> 62mmHg）、胸部 X 線写真にて縦隔気腫を認め、気管狭窄部位の裂傷が疑われた。2 週間の酸素加ケージレストで縦隔気腫は消失、肺機能も改善（Pao<sub>2</sub> 102mmHg）した。気管支鏡検査にて喉頭直下の良性気管狭窄と診断。T チューブを 2 カ月間留置したが、抜去後すぐに喘鳴は再発。そこで気管管状切除・再建術を実施した。両側甲状腺腫を認め、第 2-3 気管軟骨輪部が限局性にゴム状に変性していた。現在術後 2 ヶ月経過するが喘鳴はみられない。猫では喉頭直下に良性気管狭窄が生じることはまれである。獣医および人医領域から病態について考察する。